

花蓮のように

朝早くから開き始めた花は昼頃には一旦閉じてしまう。

3日だけ花が咲き、4日目には花びらを散らす。

蕾は次々と生命力を発揮し、

やがて2ヶ月間の開花ショーが始まる。

人の目に触れるのはこの時が最後である。

太陽が昇ると共に輝こうとする姿は何とも言えないおもいである。

その後、枯れゆく姿は人の目には止まらない。

泥のなかで命を終えた蓮根が、

新たな命に新芽として引き継ぐ準備にかかる。

開花のために一年中泥の中で生きているという

自然の摂理を目の当たりに実感する。

大げさではなく自分の存在を納得さす。

そんな生き方をしているひとは世の中にはたくさんいる。

見えないところで、しっかりと生きている。

自然以外にとらわれることなく、

自然の恵みを理解し、生命の営みを続けている。

生きる性はあるが、できることならそんな生き方に向かっていたい。

不平不満の思いは自然からの逃避を本能に蓄積しているからだろう。

解決のしない解決を求めないことが自然といえるだろう。



政治家も人間どう生きるかを考える